平家物語評判秘傳鈔

巻第六之上

内閣文庫
和書
類 八七八七
號 二四
冊 一
架 函 二田

内閣文庫
番號 和 8787
冊數 (11)
函號 204 5

国立公文書館
National Archives of Japan

元帥陸軍
圖書之印

平家物語評判秘傳抄巻第六之上目録

新院崩御
紅葉
葵前
小督
廻文
兎聟到来

国立公文書館
National Archives of Japan

平家物語評判秘傳抄巻第六之上

新院崩御

治承五年正月一日の日門禮より東國の兵革

南都の火災よりもつて外様とぞ申しける

上皇御しうしの物の事

しうしとぞ申しける豪樂

しうしとぞ申しける有氏の

為二人と象せしとぞ也八氏寺燒失のうつ

也二日の日廣上の名ゑ打

棟中いよいよしうをけり

評曰平家逆徴生じて上と掠生る棟中の

重礼としさはしうぜ生じ三月中方様小

外様、高倉院様礼、を外様の人、御所のの
ぐるまを、ひきかへさせ給ひ、小御所にて、
上人の和德に、よりまいらせ給ひ、正二位
ぐるまに、なほ、必世に、逆鱗せ給ひ、物のかり
ぬぎ給ひ、後白河院と、申奉りし、三月二日より、山王(朝覲)の行
幸を、同中宮の、大饗東宮の、大饗、
こと、行はるべきと、いひつたへ、高倉
院の様礼、かりそめ、なれど、高倉様
なれば、高倉の、御所、始めて、神功皇后
の、辛巳の年、より始まり、禁中の

儀式、とのわたり、殿より、所々、小弟、
右衛門の、督と、申すべき、人、
和德、なり、かくハ、果ての、ものの、
ふ、を、一院の、御譴、
人、を、使ひ、平氏、より、
の、權威、と、集まり、
ぐ、より、
寄、行、
僧徒、の、
行、て、
人、僧徒、

仰ごもしくんべし。是ハ平家ニテハ權柄
とゝつく。上とうとゝ下と歳よりなれば。
平氏ハ對しく支と起しめれば強上ハ是
を憚思ふべきよつゝ。ならば線平家ハ是と思
いかゝしべきやと申しかゝ上ハ人ゝ
時ハ關白といゆゝ。關白ハ
しし所職と没收ス
きまいりしやうゝ。ハ是を
未しゝ云ゝ。ゝ。ハ仏法ハ西像
ハ時ハ生ハ是ハ方生ハ皆ハ西法ハ
德ハ人ゝ仏ハ悪と惜ハ世ハ

雜像法とゝ。ハ仏既入滅し給ひしハ仏ハ開
と化ゝ是と稱し。如来ハ金言と伝ゝ生
死ハ苦時をゝ。未法悪世ハ時ハ
とかゝ。ハ。ハ彼如来のハとゝ。
是ハとゝ。ハ仏ハ心中利欲ハ
故ハ。一切ハ仏法とゝ。
ハ。故ハ。ゝ。ハ。ハ
法ハ仏ハ心とゝ。ハ
ハ。ハ。ハ法とゝ。法と
故ハ。ハ。ハ悪仏ハ
ハ。ハ法ハ悪世ハ時
ハ。ハ悪仏ハ意と失利

欲我慢の心根とんぬる菊岳と号し
ちゝの恩をもとゞめよかに彼獄の
数ふあつまれしかくまぬ人とと賜り
拾ぐきよハつゝどゝ警蔵金の内ゝ時ハ
銀とりくゝ寶こうゝ銀ゝ時
ハ銅とりくゝ寶ともゝ故ハ
入滅の後ハ仏と如来ゝ経文と
西方ゝ浄土と偽寶をゝ
じらゝ欲ゝ欲ゝ族ゝ徒ゝ色と国
ゝ既ゝ家軍と起ゝ御蓋と焼亡
ゝの時ハ色ゝ恩行ゝ

ハ中ゝ仏ゝ小志ゝ沙門と撥
ゝ人とりくゝ
如ハ悪僧ゝ棟梁ゝ住寺ゝ
智色と流ゝ
執行ゝ
仙間ハ礼ハ仏ゝ
多ゝ故ハ神ゝ自然ゝ
ハ神社ゝ
と用ゝ神ゝ
それ日本ハ神国ゝ

りなく王法をとゞめらるゝと捨ぬる
が故なり王法すたれたるよこゝに威をうしなへり。
故に断して唱ふるもの多し。上古よ
いかなる心得にしまゝとハ守るへつまるましし
隠しくもかつくり給ひとみ扨又事は
物し所々の神社の僑繁昌しく朝敵
とはかりなりけるはじめての比仏法大にして
僑をきはめ朝敵とぞなりて天下を苦し
めさせたまふ給ハ皇上古よりの謀
なきたまふしよりこそやさてまじく今
更又仏法を捨つるよハなしと唯王法

の御意をとゝめたまひ君臣の徳をもあきら
しおハしゝハ賢才を挙られ万民を子の
ごとく小黒付ハ給へく久しき神のなし
りたまひ都を行ひつかりも僑をきはむる
仏なりしたわの正法をしめさし故に外
とうてきとなく君の御心をも臣と給
の邪正を糺し給へ賓の神々の仏なる
や知らしく寶の古部の大なるまつる
ぬしもと付ハ自然と王法をもめぐらし
下し安堂まししく仏にしよりてはじめてし
急行くを為るつぎつなどそ故にやうの

分世と動く。未世濁乱の乱相と悟ると
ゆえなり
傳曰。治承三年十二月廿八日小原頼政公。
小隠岐殿より命ぜられ作り仕りける。新しの素
書。元日の礼の儀式。古と八同
しかれども。ただ八新寺諸社の神々仏々
に自ら祭るべし。小神社修造の
ことし。小平家とうしの心をもんやしく
万民是を嘆き。又異神自家の
ごとくに。神の罰小神の罰所小
時に。神社とかろそうの
の生るべかりしに。宮の家年来の奢りの
報ぜし神の化告と。彼の告とくるし
奉りけるに。去天四詞過ぎるに心の
りの仏行ひ是と思ざるべけんや。家の
東八幡大菩薩の異変と家の夢
八変の実のごとし。小神の夢
ゆえに。所よりと思
小元日より早且より家の家の住べし
とく。三浦助義澄。大逆平右京義畠山
次郎重忠小作りく。夜半の所ら
はるる。弱国ようめく。御馬ようく出

ゆるす。御供の人々よりは、専光坊とりつぎ啓
ぶ。ゆるしあり。太平万民安全の為
なり。神宮一社と定め、宇佐義之、昌福茂
彰田宮忠常より、ひしひしとあひ
下向の時より、千業助が屋形より入せ
給ひ、悦の儀式、上下よろこびけり
やがて良将の志高深、うれひを外に
無邪より、奉幣の使ども、まのあたり
なり。
右二十像とりつぎ、付ぱ、天下を治
人ハ、下小拵、題。天下を治ぜさ

人ハ、下小拵、待失福福
の境、よ、ぶし。国を治ぜさ人。
此よ眼と付給へ
永園伝記の仏像経書の炎とあらひ
くしらさ、病つ、死給へ
評曰。雖勝と謂ぬ。此伝真正治
眼の仏、よわ、ど、何とかひ
仏像経書、ぶ、ぶ、ぶ、
佛ゑ彼滅し。王法衰滅しあ。天下よ
明し。伝ぶ、文小心を動、やれ真の仏
氏ハ、三世と悟ぶ。此伝、一生の治乱と

さてさて涙よ矣まず東大寺興福寺八幡門
八幡宮拾遺家の僧人よ
等さてさて先づ仏氏とくくいしものを
苦つさまうに所作心ハ伽藍仏像経巻と仏
法と拾ひ八幡宮ハ放逸心外奉別法
世界とさてさてぞうれだしや僧侶世界八幡
意よりくさ名とぼ殘さど善益の風
月八たりあれよりくさ部分八あらよ心と
さあけ行ともろ八名欲とつ初発
八僧侶とこうぞ世界行ぶ世界八あるさ
とハ申ぞやさて上佛八心ハ経曰不垢不浄

不增不減世界無為無得無失と云ふ本心ハ
徳を欠ふ八ものと知ぞと知ぞと知
行ぶ心分と苦ものわんや放小出雑得脱
八僧ふわぶぶと知ぞ
神院宗御八ふ色ふ
家僧八書曰ふ下八賢主萌御ふと良信
法ともぶふ忠信殘とぶ新設ふぶ
起ふ下よ僧ふぶ八ふるの無乱
しと云ふ色武鐘八妙前しふと
僧曰ふ第五年四月一日ふ信ふ小夏昌長
とふふ下八雲氣と見ふしふ知ふよ。

昌長乱入形と図しく言ふとぞ言ふ
なり今年八月に成りぬ始めて源氏の方場多
無乱なりげし。悪しく源氏の方場多
し。去る十五日の月小三位の御悦ある
べし。世を言ふとて言ふ。ならしてその
ならひ三位なり。一よ平家の従軍より信豆国
源氏と響と知らるべきなり。源氏
源氏と討伐の忠進なり。二よ工藤
庄司景光平行綱と生捕。是ハ去る年
八月よ早河合戦の平家よりしく
わ源三郎と討しなり。三よ梶原平三

景時。始めて頼朝の眼しまり。已上三位十五
日の中よりなり。福なり。遠く兵心と
扱よ。是ハ彼の心。安ならト錯よりなり
なるべし。貪愚とりよりたるよ
とし。小物なるべし。凡良将の兵と用
心得ずよ王しんとしなりて。
よ王なり者ハ人間の長なり。人ハ万物
の長なり。万物よ長なるの人なるよ。
なるべき者。行ぶ縁の一物よりなり
や。凡よ良将万物とつなく。万物よ使
ハ凡なるべ。所以よ一所なるなり。

ゝ申しの時八百ゝ三ゝ用ゝ味
方八岳とゝ敵八氣とゝ
ゝ敵よ今雲氣八ゝ
ゝ記ゝ後世八
ゝ惑ゝ文句ゝ
隠蓋八ゝ隔ゝ

雲氣二傳

氣ハ二種ゝ天小ゝ
ゝ雲ゝ
ゝ奇法ゝ云ゝ
ゝ実ハ奇ゝ

八二ゝ氣ゝ請術ゝ人ゝ氣ゝ
八氣八強弱ゝ二氣八請術ゝ家八氣
ゝ微妙ゝ傳受ゝ小人ゝ惑ゝ記ゝ
大公曰八微八氣密意八人氣八極ゝ
孫子曰三時ゝ云ゝ
曰傳ゝ云ゝ岳我腸八ゝ精神ゝ
ゝ現ゝ
ゝ
考ゝ岳法曰貪ゝ
筮氣之傳受
寅上刻小記ゝ

香を焼く。乾元亨利貞と二百八十篇誦し掌を合せ天神地祇小指を誓ふ曰。人生固陋にして。勝負吉凶の運を知らず作願ハ天。清実小納受ましまして勝負の徴をあらはし給へと。祈て香をつまむ眼を閉ぎ。乾元亨利貞の文を又三十返唱て眼を開き。筮を取よ。清明に見た直しく。或ハ直煙の中より二三本又三や四本を取て筮を不吉とも一つ取る時ハ吉凶をきどり付し。亦筮竹気の秘伝極妙の大事なし。其外二輪七角の

気しく云けるは口伝なし

紅葉

ある高倉院御在位の時より。紅葉を愛し給ひて。小松の御山にとつて植。欄楓の色妍きを植させ。紅葉山と名付く給ひけりしらせ給ふ。御飽足まじく。或夜風はげしく吹て。紅葉皆吹ちらしけれバ。殿守の伴のみやつこあさまだきにとく出て落葉をはきあつめ枝をも末葉をひろいあつめて。さむかりけれバ酒あたゝめけるとて薪にして仕けり。

三教主上義篤八世異国より召られ行幸
なりとけいきこと。主行義人をよ行くこころ
わくかくこの。なのくもえバ志うしわ
こころ義人学こおかのうさ面。高八高
異国主つ紀篤と。ちうよ作ちるよ海ふ
ちちんがしいるす。ちうさちとちんぞん
やこのこけちる

拝曰。実院御在位八時。紀篤八義篤
こちうと。ちびこしきわつ面のくめ
ちびしく。異こと失けちよ。ちり上御幸
なちくこちる。枝向よ面とのくちて

紀篤と焼八詩と。異こ出さ召ふい。都く獻
感れ。ちとくる。異主八御氣情こち。
実よ異こちこち面とこうしくりと。せよ
わくさこちくハ。ちうしふ。ちくと。ちと上。古人の
心と異こ今召こ主こ。こく。春面と春とふちる。
異德こちる。ちくこ。年月紀篤と也
ちひりこづ山とつ。ちふちつちちふ。上
ちるとも。都。必下よ。苦費こちこの。
上八好ふとづ下必主と好。代少隨八陽帝。
船とも召こちこく。境内悪船とこく。居の主
宗皇帝。分とも。ちふいしこづ九皇八公

神とひらぐと。是王劔と申すなり。國中
打ちえく劔とうてうく。齊の景公馬と申す
らむ。旅の門より名馬充滿。是右の記擬の
ごとや。故小下ハ必ず上に人の心よりさぐるなり。
この故に上必ず下万民と安ずべきなり。と如
安政の諫と言ふ。書に。若賢才の人と云ふ。用ゆると如
時ハ必ず下泰平と得給ふ。此右賢主の
気ハ少ハ少しも平家に向ひ
く。右威と失給ふ。多の者ども悪と申す
して。王位と捨給ふ。是右くぐ。

ふく。ここに位とうしなひ。大公日。國と治
の大家ハ民たともすなり在民とたのもし
しと。学ぶ。是樹と倒と。狂ふ。
云ふ。故に此右小者小者ハ右と謂ふ。
者ハ盗人よりも衣裳と奪ふ。
呼ぶと。学ぶ。
不徳なしとくるの人色の縫と。彼ハ下
ふれけるの。賢者ハ者し。一重の衣の下
と助る徳なるべし。此右小者ハ志
ハかりにもなるべし。大者ハ志ハ
ふく。婦人の仁。化世ハ少。

なよかりしかばとて行隆卿をば召
しかへされ。平家よりは抽賞を給はりのち良将
の人と沿るべしや。一節の軍功とりたる方
衆の目よりのやうにわがまゝをよろこ
小松の内大臣の北方人の仁と云ひて
葉前
中宮の御方よりの女房の内
つかへまゐらせ上臺。思ひざる外龍顔に近仕する
変をなりもてなし。寵愛しかくしく
きやうやうの内に忘れなりけるを。女房も
ちつゝかど。却くまの内ばかりなりけり。

角付詠歌よりうるはしき男と生まれし毛歓する
ものかな。女と生まれし悲酸するものかな。男
は色僕小封ぜらるべし。女は妃とうるはしく
ありよしと云ひて。
人。女御后とうるはしくなるべきなり。国母仙院とし仰ぎ
られずして。三名と葉女御うるはしく嘯名れ
ける。主上色と宮ばかりなる後はめでたくなる
評曰。哭色いとしくもてなしけるや。
さまで聖人の内とは。語くはなるべ
怪しかるべしと云ひて。生れもがらの内にて乃
とうるものなよ人とうるはしく語るとぞ

ゆゑ。語らく色とあるにも付ハ語るさふ
もの。顔閑しく云ふのハあやまちと
再度ゝ云ふ。人し養ふ也ハ為ひけり。
あるにつけ今やうぐもも語るさうで云人ハ
行末堅固うるゝ心得がゝ。我一ゝ
所ゝよりくあやまちるもあるさ。故ハ
変ゝしも思ふさうで云人ハあやまちる
人ハ嘆べし。されど語とも
人始ゝあやまちる初ハ千人ゝ
ゆゑハあやまちる人もあれ。色語
ゝ云ふ。

煩悩八万四千ゝ人ハ。中ハ色慾と
りくむ者ゝ。女ゝとのくやうして。
衣服ゝ。香薫ハ。ゝ蘭ハ。ゝださ。神
ハ。ゝ薫付ハ。ゝ通ハ羅漢語
凡ハ。ゝ者し心と寄ゝ。ゝ者
ゝ生ハ徳人。ゝ者ゝ人多し。
ゝや此葉前ハ。数千人ハ。女ゝ語ゝ
色ハ。ゝ入再入ハ。ゝ
ゝ恵ハ。ゝ媚ゝ。ゝ宛柳枝
ゝ梅花ハ。梅花のゝ
ゝ主上ゝ

なりけるぞ。しかれバかく聖徳の諫をもちゐ給ふハ実
ざる時なれバ心をとゞめ給ふか
さるゆへにや後しかりし南無の誹謗。後代の
恥と思ふ事。此善悪を思ひしるべきにいふ
也。賢愚しらべてきくとよく心得べきやされバ
人のしくハいふハ人のそしるを恥と思ひ
みちくの後ハしりぞく親の護世の誹
としかへりてこそ。はなはだ命をもつて諫よりてを
る事ハ世に名をさへいふかとや。位在世を
もつかしく君家ともにはかりごとて世を乱
なりける唐家の家臣も帝業をつゞきてむかしを

さて臣君御心の中にハなく歎なく猶よ
の給ひて人々ぞしく此むね思召てぞ申さるゝ任
なりし実頼の君なるべし。然るに関白忠家
ましての臨終と病して給ひ。何事なるか候
のぞき。件の女房とりしられしき基房
が摘子に仕ける人ハ忠臣のごとくにして思ふにありし
やしきれけるも君の御臨終と痛みて思ひハ
なく変ハ忠なるによ似るものなりと也。忠ハ小
人の忠主へつかへる忠のしく賢主へ忠臣の
諫なるよからむ事ぞ。されど唐の玄宗皇帝
の時ぢなる慮江王と亡して。其巻人と集

殿宮中より入給ひしに常色とも覚給へり。
あり付て宗王殿と云人に向て曰。汝此
義母と云ふ。金れよりこそ。慮江王
参内を尋ねもとめ給へ。大色と亡
ぬと。殿上朕色と宮中より入給ひ云ふと
王殿がのたまひしは。檀公郎の若と
うくを国より行付よ。檀公詰給へ曰。
今此国何よりくぼうびくる。若
申げるは。若と思ふ
てほうびいるとと申。檀公曰。若と思
と思ふとまるは陽若。何ぞ亡るやと

云給へど。郎の若と若こと云へ
用ゐわざ。思と思へ云へ退
変行さんぞ。殿上りじうも申。今色
とうくを若とも付は慮江主と謗り
給へ。如何と云へ。慮江主こと更と
殺くを婦とる。色思しへ。若
又慮江主をうて。又を婦とると給へ。
色思さと思と云給へ。退給へ
よわるぞやと申げ。宮中と
驚給へ。遠よ此義母宮中と出
給へ。人と色とうくを付は基房

心ハ主殿ガ心ニハ大ニ違ヒ物し

小督

主上ハ惡摩ノ御用ニ召サレ給フ事ヲ

ト申ケレバ、サヤウニ有ンズルト、中宮ノ御

方ニ、横町中納言ノ娘、小督殿

トヤ申シ、樂人ニ、ココロ有ル琴ノ

上手ヲ、ウシナヒ給ヒテ、世ノ

ヲ隱居ス。いまだ少將時ノ初ニ、

中宮ノ姫ハ、親ト、文ヲ、ツカハシ

ケルガ、後ハ、ウビサセ給ヒケルガ、

今ハ、ヲ人ニ、ヨセラレ給ヒテ、誰ニ、

カヨヒ給ヒ、別ノ用ヤ、袖ヲ、ヒタ

ケ、ワヒ、少將ハ、ウシロメタク、小督殿ト、今

一目ヲ、ヒタスラ、ヒタスラ、ウラヤ、ヲ、ハ、ヒ

ヒ、ケルガ、付小督殿ノ、ホトリ、ケル、ヲ

ノ、ヒ、ウ、ウ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、

御簾ノ中ヘ、一首ノ、歌ヲ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、

ケリ、

作曰、主上、御前ノ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、

御恨ノ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、

ケ、ヒ、ヒ、中宮、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、

惡ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、

とものぐさうなりしとて。詞議ありけるよ。時
の関白殿申されけるハ。所詮ハ葉と
基房が猶よとの事にてあるよハ。
しらぬ。此ものいひ。
主上更よ驚きとうさせ給ぐるもけしバ。
殿上下の関白殿よ光とうとうぐ。
故よ又為詮議のさぶけ。又南関白殿
申されけるハ。摂政殿中納言重教が娘ニ。
さうする義人よくるさうしたんじ。彼と
御なぐさよのしたまとと思直さ
給んと申されぬ。連座の人々御よ

色ハうれなさ義人とい。殘よハさうる
翠の上手なれむ。小督殿ハ帝よんよハ
爭うる主上も御ものを給ぐべけ
くぐよ此義ハ
付ハ小松大臣。いぐ
ぐこ付ハ中納言
詞議義ハよ。市
ぐ家ハ計
中ぐ人ぐ。恐ある
よ。凡下の身よ
義女と
家とぐ。禍の基とも

いとんや色ハ一天ハ主万民ハ父母ましく渡
世ぶいとうぐ義ぶ淫乱とりくてすり
人ゝ罪ゝ色ゝ色ゝ人ゝ母ゝ世ハ歎うゝ
訪ひ色ゝと諫佐とハうのどぶ所ゝと長
ぢゝ申ゝ詮議更ゝ心得ゝ
一川次ゝハ十善ハ帝王とりて
ゝ行迹ゝ
うゝ付ハゝ天ゝゝ世ハ政邪
天ゝゝ遠世ぶ付ハ争佛法世長久
ゝ中ゝ中ゝ中ゝ
と夜ぶ昼とゝ

ゝゝや罪ゝかゝしゝ天ゝ照覚
ゝ向ゝ義ゝゝハゝ
ゝゝ延ぶ天魔ハ
ゝと夜ゝ外行ゝ
ゝ礼ゝゝ南ゝ
ゝゝ色ゝとゝ
ハゝゝゝ色ゝ
二ゝ次ゝハ
ゝゝゝ
ゝゝ
ゝ下ゝ肩ゝ
ゝ恩ゝ

乃種と進出て申さんよりは爭て攝政殿
も御免あらんずるぞかしやとて上代書き
ぬ人ぐ下よりは逆徒わるん支度よりは心安うう
ぞさるよりのちどり殺る者ありん対ふる
分と捨まとてぐさ退治仕ん支は為
対は平家のぐぐは諸うりんぐさ故よ後乃災
と存ぐ帝座乃対と申てしりぐ。
されども人よりは為こそやあらよりて
しぐ者の思ふんしん支とうまりぐ
らぐ聖德ふて申ぐうるし。
なりぐうるまぐりんやぐ世

ふるぐ思とぐぐ者と諫
まりぐんよりなどう世者絶よりてぐ
思うんさ世殺ぐんやあは行末目出
支よこそと申されけるぐ。諸侍ども
ふひひぐ。諸侍ども絶よりは小智者と者世
諫曰。諸邪進対は衆賢退とは正ぐ
なぐ。賢者乃諫と用ぐう対は滅と好
りのうる退ぐさ諸者乃支と用う対は滅
者ぐうぐと待ぐ多ありまるぐ
殺よ主上小智者ぐとあげらる支。

吳德宇し。延喜衛門縁言曰。宮中の
妻也。人の券女ちさい色服礼の物と。
称ハ天帝の命ハ解ることよりい好の謀一
次よハ一夫ハ者妻也わるべさ女ハ。ちと
ふこち姓称しもちろ
ちもちし支ものよ意しいるの風
野心雙言敵ハ者ちく謀うく支のき
しし。わるべ故よおハ唐ち髪と造
海くく女妻とくのるべさりのとじ
走ちべさりの母ちとけハ髪と造物
海のちぎれ古歌ちくべう

ものと髪も肩ちの者ちどく誰ち縁
ものさと議ち。古ハ初人ち
しし。未世ハ今ハ一句よちよハ惑
いるの故ち女ちもちち。十言の
ち拉と。ハ神とくち色ち
さる小ちじや。ちち上小督殿ハ。清泉大
納言隆房のかハ人ちと者ちち
ちちじ。ハ争ちぐう
ものち。ハ色者ちハ謀ちと
ちじ。菅唐ハ太宗皇帝。鄭仁基と言者
ハ娘ち陸氏ハちじ。と絡ち

彼よりも宗義女うつくしくとやうに宮中より
上らせんと仰せられけれども謙儀魏徴也
いつくしの譲り申すハ第一ハ此女陰氏
よりうつくしん爰と父紂ハ百姓ハ父母
百姓ハ紂ハ百姓ハ父母と紂ハ百姓ハ
父母とうつくしく万姓ハ民とよハうつくしく思ふ
ねよ。毒樹ハ枝さと思ふ民ハ家
ハ安くしんと思ふ。膏粱ハ味と食
しなふ時ハ者又万民ハ悲うくしん爰と思
しかバ者義女と求らしん時ハ争う万民ハ
妻女ハ思ふと思ふべけんや彼よ今鄭仁

基ゞ娘人よ約すとも色とうつくしく宮
中よ百姓ハ父母ハ父母ハ百姓ハ爰と
思ふ者ハ申ハ申ハ申ハ申ハ申ハ申ハ申ハ大
よ敬ふ也。彼ハ百姓ハ思ふと彼ハ
也ふと彼ハ者小智前とりまれけり
爰いしんで聖王ハ和意しうるしんや
古記曰彼ハ王位ハ
ふ一つよハ天下ハ拾二つよハ天下ハ三
ふりよハ天下ハ武ふ彼ハ物と失ハ
王威と云しこと和ハ物と失ハ
今天下と争良将先ハ人ものよ古

爭論し侍よりて下とたゝかひのしぎれば
片時愚者の引見もの不叶よのつゝど
右納言隆房小督の局の家のもとをたづねおよび給
く簾中より玉章とうげ入給ふ礼をうし
乞凡夫の事のうへ心ひしく諫もきこえぬ
小督の局の心ばへ憤と雪給ひしく思出給ふ
度重恩の二字をもつて行とゝのへば既憤
なりし故ハ女性なれく下より為ざれ
ゝ故よ門程と出給ふ早速なる
とかゝ衣と墨染し給ふ御つぎたりうう
出給ひ乞ひ給ふ時ハ家しとと

ゝ又さしうくしく思ひ入給ひしひと
恐くも門程と逃給ふ乞事のせ
ましく実の貞女の四なりしかば君ハ人
とまてゝ如何ぞ身のゝと先とせんや君と
夫の君主の妻ものさ身とくくあよ身
と思給ふ乞金吾殿女よりしてされば
又ぞや仲国よ具せくこゝ二度宮中へ
参入給ふ乞大うう形し故よ言くうき
ものよ逢給ひ給ふ礼入ると行せ
君よしうさうとて乞まゝ乞孤と受
給ふ乞外ハ義人よりゝ門恩女とりの

なきものゝ
仲國がゝ小督の前と云まゝ
色新宮うゝみれむ力及ぶべきにてし仲
國。賢き人の者なゝばゝ
ゝゝい丁旦尋まゝ
ゝゝ上ハ絶ゝハゝ
ゝゝハ申ゝ
ゝゝ色全人
君ゝ人民と懐思
ゝゝ行ゝ
諫ゝハ賢君ゝ人
國。緋色りゝてゝ
ゝゝゝゝ
ゝゝ
ゝゝ実ハ忠義ゝ
ゝゝ色と名付ゝ
ゝゝ

過文

入乃相國法皇となぐさゝ
ゝ侍ゝ
皇ゝ
ゝ娘ゝ
ゝ
ゝ

さきをいくに未十月八日の夕べ八ツ時とぞ聞こえける
和田の八郎義盛を先に立てしかるべき
下らるべきと揚言しけれども
乃ち是を上らるべしやいかがせんと
ばかりにて暫くは何ぐ色と
姉をとりくすまるハ
るハかりにて陸奥と所上らるべしと給ふ
八幡宮の鳥居の前にて十失十福
取よ後世八者つ書べきもの
未だ義仲を討ちたてまつる
道にて東海道の大勢の
和陸の方にとまりぬ
平家とぼうりくに二人八将軍と仰
まんとて宮つの墨ハ既八日八ツ
小しくて下八都を出と宵源氏八
一陽来生八時よ帝
よ義仲を平家と一日しらくすんと宣
色良将小わるど軍八前後と
平家妻源氏と妻
八絶よ敵と引八顔朝
て初徳と長じ
平家と攻つさ時
源軍毒八弟一也凡他国よ

軍のしく日しよ千金の費をそそぐ
已と雪とのごとく雪ぬ故よ良将を害と補て
自やまりかくぐる付ハそれ已が勢あるりかく。
後は他国よ出と出て御しよ義仲。
頼朝よ之じく。十日ともさきに新くのぐん
を雪ぬ之悪うよわるどや
伊日。信義ぬ手五位廿八日ふる金宮の合
旨。未尚義仲新戴しく乳人の中三兼遠
とちく日。平家既運書。源氏出ぐさ付
りと。如何計づくく宮りまとが日。
兵合旨。ぬうう新国の源氏よ下れいの。

中しく。信之国小形りまて形ハ。源氏の
長ふとこ。今強よ和源付故と親く幾
ど。ぬくくき十門の人の討くく。東八分国
の武士ハ皆形ぬよ付いの。故
よ之ハ中奨信濃の武士と信ぬて御
覧ぬと日付よ。義仲ハ思議の昇
愛と見ぬて。該訪の別当とりて。
兄弟の山よ八幡の社と建。餅酒ぬ影
しう用さしく。花正の氏よ之とひる。
新氏ぬ之とけ。之何る人ハ富やん
ぬ同よ。ぐくしの信中りハ義仲

天下の大将軍よりうけたまはるべきよし霊験
をあらはすべきうつ御霊験
よりうつ御宗の者
うつ信濃の者
従付ぬ
変じ
信濃国中の武士
行親等
とうつ使
をまはしつ
よ信濃国と信濃
義仲
義仲
幸を
と神
小小
滝
加
過
上
国
定
威勢

義
小
平家の従軍等
諫
小
評
像
愚
平家の評
一
変
極
よ
思
平
五日七日

変ずべきやと思ふはおろかなり。天運時いたりぬれば。
陽気下よりきざしのぼりつる時ハ。数万の
隆替なるもしばし消ゆるも一日二日の外
とはいはず。故に國の滅事も又かくの如。
かゝる時代に行あたりて。つゞき縷ゆるやうなる
ふくしこしてゆるしありぬべくもなき
あるじのもたぬ災の下よりもつ上下の
心中に充満すれと見えしが時節によりくハ
終の変たるべきもよく綴にて天下に大乱
起るものなり。されバ今平家の時勢と源氏
の時勢と勘見るに。平家ハ陽中の陰にして。

陽気おこりて天下のはじめ。源氏ハ陰中
の陽をもつて次第に陽気立のぼりぬ。
平家ハ平家の安きに居て危きを忘れて下の
者の老若男女福に限りなき事を思ひ栄ける時ハ
色欲に耽り亡つる時にあたりぬ。ある事を思ひ
わすかに勢ハ。木曾義仲ハ小國山中の猟人。
杣人なとを催し。剛盗に催したる軍をおこし
に信したりしが。縁信濃一国の者が随ひと云
も。越後国にハ城太郎助長。同四郎助茂ハ数
万の兵を持しつらねるまで。撫敵にて出されん
と定る。更に心得たりし。敵といふりの鬼神

かぶ人びとくよりくへ今るとうと別よるとの
なるべし。角宮ゟ程ぬ角けもてし。日ぶ
人の味方皆敵とうるものうれば。味方をそ
ときうと形よほくどされば恩とぬく
しくくと色する対ハ敵ときくうと。
敵と申くしくれ仁とやとてうる対ハ味
方し敵とうるの申しぬむ敵ハ外よるく唯
世ゟ自心と雑ぶ古人曰自分と古るハ外の
ものよりうどとしてうと今家必ううば。
源氏ハ切りべき対うるうる如何で此ほを
得ぬべきうよわくさきてし怨て異国

ハのうしハ対ハうるとうるどしく手引
とうくれ教と申うるうる皆此類多。
故よ未世ハ人色よ心と迴ぬ磨又良将
ハうくよ敵ゟうると忠進ぬうしぬ
宮ぐくふりうしううしうやくうるハ
ぐしを色ハ詞こそいとうとしうしを
心ようくさ慮ゟ異ぬ悪将ハ敵ハ蝶記と申
くハを色と変じ俄よわくうくめく。
良将ハいうしさハどくをれを言。
敵人ハ心とうんちさん嬉とをて今
ゟ申の言ハ良将よれ仰うと

とゝぐべき志更に初諱のてしまわるべき
事勇剛勢勇気ある人なりけるが故に詞は
と聞に叶はとゝぐべし心に初諱なくして
城太郎と称に思はしけるに愚なる
に思はるゝ故に後世の人なる方寸の胸
の中に浮べるとゝ下と求
ゆかりまつる。
二月一日に陣内行ふ城太郎助長諱後
守に任ぜらるゝ。
評曰。色未常と対せるに諱しとゝぐべし。
却て〻〻人威と失言なるべし

平家人々一門は日々に日々に例なき官位
に経のぼりて終にゝ武士に
官禄と給はるべきに年月既久しかるに
今更新に助長に官位と免ぜらるゝ。
色人の指図なる如し此付に弟に助
長し悦づく付に
更に人賞しく万民悦しく賞に
と。おく蓋人賞と云今此賞一人賞〻
万民にのぶ賞よわるゝどや次に義仲
人義芸と挙られし助長が心
とゝゝゝ也諱人し夜ぜど作平家と

極ずしてあるべきこと備へのつくこと
條よ度と計らひ是愚将なり法師曰へと後
く人よ敗さるべしとぞ云ひ
彼曰源義経日よ彼四郎
言綱とりつく密に中国へ源氏よ心と
合らつとぞ云ひ
武蔵坊指守へ義基が評曰小勇あれども大
才なきものし於行とうのしに敵国を
度と謀とるべきぞ謀兄弟とぞ云し
とべくと心中よ是と源外に敵よ和し
くいうと敵へ小と寡と謀とりく

是と云とづき者し法師曰ち駿よりの
一とりくと軽しくと云ふ
良将へ心賢下ると伏勢へ是がごとくよ
岳と用るのし然よ義基卒尖へ云説
くぞ云ふ早く人よ情しよりく
を付勢とうの者わし法師曰急攻るの
九大へしよ勇ぜ云ふ
彼曰武蔵坊指守義基平氏へ大将源氏丈
判官季貞よ責云ふ源義経二月
九日小首とし大路とされけりと
源氏へ諸士金金

義基軍ハ時勢を
門ハ平家の憍中ハ
中よりくぐちを
と申けれど彼を
ハ時ハ為
申けれど實平日
ありとぞ
必害と為
強くあるべしと
き時ハ
家よりハ
ろよと傳ハ武士
ハ方より
いくとも
民と
を動
ハ牡ハ卦
和方の
多
友義基を
伊勢国ハ住人
家ハ民ハ
ろよと傳ハ武士
ハ方より
いくとも
民と
を動
ハ牡ハ卦
和方の
多
友義基を
伊勢国ハ住人

と評ハ
義基ハ
ハ平家
中よりと
と申
ハ時ハ
申けれ
ありと
必害
強くあ
き時ハ
と評ハ
義基ハ
ハ平家
中よりと
と申
ハ時ハ
申けれ
ありと
必害
強くあ
き時ハ
家ハ民ハ
ろよと傳ハ武士
ハ方より
いくとも
民と
を動
ハ牡ハ卦
和方の
多
友義基を
伊勢国ハ住人

凡隠孫のごく話と称するものは
必ず三川の大講の中と陸奥とこそ
密々と云ふなれ。二つの民の心
とうとかるべけれ。事徳と奉しり物し。
八と隣の武士の気情を家し。ごとく
よろづ孫とぞ。世よ害あん
和人ものとばんを討ち拉蔵と
長ぜり物し。色話と奉り人宮法師は
通信ち孫ごとし。支と訪よろこ。
西寂ものいかばかりとあるものなよ

君将と謂つるものし
傳曰。子島通信父通信小申は
ぱ此の程ご御ゆ法ものよりひ。
かけとうれた。東国小國小蝦夷人心ち孫
氏よ多しいとぐ。
と思ふ志ものとしたくゆ上陸国
人武士を孫ぞ。
ちくさ由。度々交よ孫
用ぞ。安よ蝦と他よ屬ち。故よ子
長通信安蝦国人部。伯父奴田治郎と孫
此ものと話談しとく。世上人気運を歩

うんとけんとに成よ此てびの名殘
ぶてとうるに是実に其法よ叶ぬ公曰。
夜ぶるるハ存ぶるよわるぶと夜ぶる
よ存とうるに。
傳曰。所詮郎通信ら郎等。飯田源五郎
しと云者行ぶしくうハ通けん安藝國へ
越。お長通信よ此申けぶ伯父坂由
次郎大ぶに驚ぶ急名我と企てんと
教て通信申けるハ今案ぶ場ぶ彼と
挑戦けんせぶ利ぶ命ぶ長密よ謀
とりぶ彼が怠と案ぶ虚よ多ぶ

是と討命ぶ。敵ぶうがぶ上ぶ
やけぶ是此ぶ換便ぶ。
意ハ岳百人ぶ換見とつり敵
ハるとぶ又ハ虚實と窺ぶ。
と用心ハていぶ。
ぶ額ハハるハ前よ侍一人山伏ぶ出
ぶよ百人余藝國へ
なぶ國ハ斉糧ぶ。
ぶ付ぶ。ら山伏ぶ
ぶ人ぶ。奴由次郎ぶ
伏申けるハ地下人ぶ

豪勢仕る者物語申しける八伊予國の住人河野四郎通信と云人申人を頼て入る西寂と云申人討敵のよしつく。河野四郎の長小通信と云人八安藤國奴田次郎八宿所よりいとまをとる。世間と傳事なひく安らへ支し色犯親八敵と云うとく坂田次郎と頼基と仰られける如ハ去七日八日俄に通信病死しなひと申。此侍し喪礼八仰とく通つと仰ひしく変わらんとうるさ申げ去て西寂大きに怒。郎おぐしよ命る。

申りける者を家の人ハ聞もあへず家と守護しなくて変いとまをとる事ハ去しかや。大願成就の山伏ハ山伏と言なる者ハ西寂が安堵と言なる山伏と言ハ西寂ごいてんこと引出物しくかへしなぬ。後西寂此の酒宴終夜ありしく上下遠と云ふ通信ハ侍の基を怠と家りしく物百疋と三千よ。一手八先乃行人八てい出てしとと。一ハ中と云ふ通と先陣と云ふ世ハ攻る対前後

人二ほ左右しのしく火とうけ。殘射小志
けりしくこうしを。芝實よ深く謀く。岳法曰。
先第く殘くものハ勝しくこうしを通信敵
人強と知く弱と用しうしく殘りしよ西嶽
安しよ后く危と云を敵人寄ぐしくこの
ものと牧ぐ手ぐこうとしくこうと故よ此
通信ぐ心と。西嶽ぐ心とたしくべうこうハ戦
ざりよ西嶽負ぐしくこうこの月のしくどや。
敵よ後世人武將我と知敵と知ものと事し
きこうを敵と知ハ吾と牧やどや。敵と知ふし
ハ敵とうりしくどや。彩勢人強弱を云と

敵陣人強弱と知ハ行ど我よ害とうく
ぐしや。岳法曰。勝ぐしくこうとしく
敵人勝ぐしくと作しくこうと敵よ岳法曰。敵
敵よ負ぐしくこうと計しくこうと勝べしくこうと先
よしくこうしくこうを
河陽ぐ帰通信。ぐしくこうを西嶽と殺ぐど
しくこうを國ぐ通人海上を經ぐ。大
変人かしくこうとうつしくこうを不先しくこうを
ぐ。法曰。我作しくハ敵しくこうのしくこうを大
事人かしくこうハ。一時しくこうを命と斷ぐ
ものしくこうぐしくこうを作ぐ國人者しくこうを心

さとかゝるゐけん為に生ながらくわしくこそ
殺害(せつがい)とおしくもあれ。己が身の威権(いけん)を称(しようめ)ん
ともやかれハ首(くび)をとりしくゝりてをさ
ゆへ支を傑(けつ)しく為付(おそ)ハ讒人(ざんにん)よしろ
たしか行(ぎやう)とも及ざりしを大かたさきと計(はか)く
ものとこしもせし危悔(あやうき)上ともとまりの讒(ちやう)ある
親(おや)の敵(かたき)なれバ憎(にく)しと思ハゝハ理なり
されども武(ぶ)門の志(こゝろざし)あるへき身ハ。家をと
起(おこ)しなをとわりせと肝要(かんよう)と後如何で
死骸(しがい)まてゞよ憎(にく)さを続せあけんや。
既(すで)に生(いき)ありしもふりし敵(かたき)なれば。

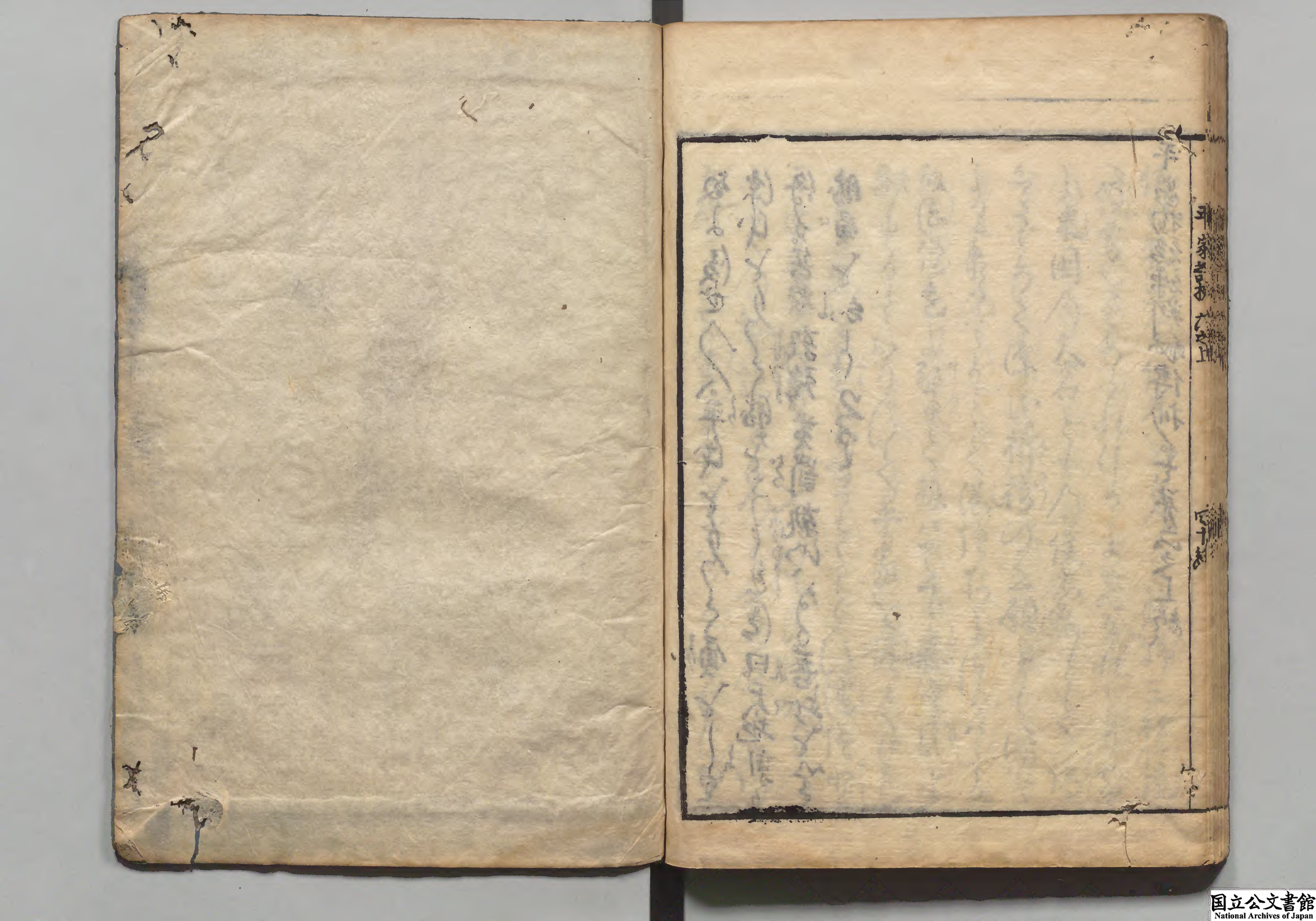
その死骸(がい)ハ天地の間(つち)にしばらくも所(じやう)の有ま
憎(にく)さをわすれんや。是(これ)却(かへつ)て非(ひ)礼のふる
まひなれバ危(あやうき)ものなりけり。故(ゆへ)に武(ぶ)士として
ハ名を揚(あげ)家を起(おこ)さん支(さ)ちと心がけさす物也
昔日。神武(じむ)天皇。熊野(くま)よりして夷(えびす)を却(しりぞ)け貴(とうと)き
ならいけるなかで大和国(やまとのくに)宇陀(うだ)郡(ごほり)よりよし
ましけるに家(か)の志(こゝろざし)あさまにて夷(えびす)に恐(をそれ)て
事ハて。故に天皇。死人の頭(くび)とこそあるべき
夷(えびす)の大将三人の首(くび)しとる札(ふだ)と書(かき)かく
行列(ぎやうれつ)儀式(ぎしき)と調(とゝの)へしてさかしけれど
安堵(ど)の思いをなし。王位(い)と貴(たつと)き夷(えびす)と

防しかりしかども心得のあ
ひだ敵の首をもとりしかども侍の面
々の耳目よりはあまたとなく変を示しかば
あまつさへ人々故を通信の初人々さる
和らぎ給へ
然れども別当信俊はもとより家常郷綱
類々の時平家へ忠を存じ今又却て平
家へ逆心とのたまふ是忠信やうきの
ものにあらんと云ひけれども家常郷
綱は平家未滅亡の時分より源氏通と存
ぜ故よりの時々媚よりの忠進する

ものの如くにて忠盛重盛と忠ぎうよ
りの忠と書きよりはあらんずれども若き時心中
ひとへに平家へ報恩と存じ今又
又平家より背き給へ但此の主よりと
時よ寄べしとも人書き諫忠とつて
と云ひしも主用ぜしに国家を下を
苦しむじいんで是よりすべんや況
ハ下人の浮船に乗て入せ
んとすれども是良将賢人の初なれども
小人愚者の初なれば
云ひ出でしよりハ古人曰乱国の

傳曰。彤弧ハ伊勢ノ熊野三社ノ御願書ト云フ。是レハ伊勢ノ大名ト云フ。偽ラ
ヨ東國ハ大名ト云フ。伊勢ノ祈誓ノ立願ト云フ。國々ノ源氏ハ
ヨリ乗ル。ト云フ。源氏ハ清盛ヲ恐ルヽ。故ニ清盛ヲ恐ルヽ。
故ニ清盛ヲ恐ルヽ。故ハ平家ト相ヒ敵源氏ヨリ
ヨリ忠ト書ク。ヲ清盛ヲ
ヨリ忠義ヲ存ス。良將カヽ
ヨリ諫ト云フ。ヲ奇ハ
ヨリ終ヨリ書ヨリ。

故ニ後世ハ平氏ヲ負ト云フ。
源氏ヲ勝ト云フ。天地創
始ノ吾衆孰強ヲ問ヒ曰。
勝負ヲ云フ。



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan